

基調講演

「脱国家的アクターの可能性
一人の移動と国家の“せめぎ合い”を超えるには」

陳 天璽

早稲田大学国際学術院 教授

はじめに

第 15 回インカレ国際セミナーで私にお話しする機会をくださった組織委員会の先生方、関係者の皆様、ありがとうございます。

2つの視点で考える

Hello, everyone. 大家好。今日は「脱国家的アクターの可能性—人の移動と国家の“せめぎ合い”を超えるには」というタイトルでお話しさせていただきますが、基本的にいくつかポイントがあります。

現在、非常に国家主義、自国中心主義が強まっているこの時代に、どのように少し引いた形で国際関係、国際社会、さらには国という枠を外したグローバル、もしくはローカルな社会を見ていけばよいのか、どのように感じていけばよいのか、というのが 1 つのポイントです。ニュースなどではどうしても国をベースにした話が多くなるので、そうでないところから物を見ていくということです。

もう 1 つは、ニュースや本などで語られることは非常に遠く感じてしまうことがありますが、それを生活の中の身近なところから見つけていってほしいというのが 2 つ目のポイントです。コンビニに行くとき働いている人は外国人が多くないですか。早稲田大学の近くだと留学生が働いているのですが、そういった身近なところでの人の移動や国際関係、もしくはグローバル社会やローカル社会の中での人の移動との関係をどのように見ていけばよいのかを自分の生活の中から感じていってほしいというのが 2 つ目のポイントです。

そういったものを今日は皆さんと対話を

しながら、気楽な感じで話していけたらいいなと思います。みんなで議論し合いながらお話しできたらなと思います。

「国籍」をめぐって

国民、国家、もしくは国籍ありきな時代、あなたは何人ですかと聞かれたとき、何をもとに答えますか。

生まれたところとか親の国籍、もしくはパスポートで答えるということが多くあると思います。パスポートは今日の話とも関係ありません。人が移動するときに使い、そして国家がパスポートを与えることによって、その人をどのように分類するかという非常に大きな問題があります。パスポートがあっても当然、国籍があっても当然となっている時代に、私たちはそこに安住してしまっているのか、次に来る時代がどんな時代なのかというのを考えなければいけないと思います。

例えば最近では政治家の蓮舫氏の話がありました。それから、ノーベル文学賞のイシグロカズオさん。私たちは彼を何人と言いますか。蓮舫氏は何人と言いますか。そんな人がたくさん増えていると思うのです。in between な人とグレーゾーンにいる人、トランスナショナルな人、もしくはもう在日 3 世、4 世になって日本しか知らないけれども日本ではコリアンだといわれているような人。いろいろなタイプの人がいる。自分自身はあまり移動していないけれども外国人に見られるような人がある。あとは親の国籍と言いましたが、国際結婚がどんどん増えていく中、その国際結婚した親の間に生まれてきた子は自分をどのように位置付けるのか。国はどのように位置付ける

のかというのを考えていかなければいけないときに来ているのではないかと思います。それを、先ほども言ったように非常に身近なところからグローバルな問題へのヒントを皆さんに見つけていただきたい。特に皆さんのように頭がまだ柔らかいとき、いろいろな発想ができるときに怖がらずにどんどんそれを形にしていってもらおう。そういったことがこれからの社会の活性化につながるのではないかと思います。

欧米と日本をつなぐ横浜中華街

私は横浜中華街の生まれです。横浜のチャイナタウンに行ったことがない人、手を挙げてください。みんな行ったことがあるようなのでチャイナタウンの話からしたいと思います。なぜ横浜にチャイナタウンがあると思いますか。港があったからというのが答えです。横浜の開港は1859年にさかのぼります。日本はそれまで長崎以外は開港していませんでした。1854年に日米和親

条約が結ばれ、その後、ペリーが5つの港を開きます。函館、新潟、横浜、神戸、長崎と5つの港を開きました。ですが、日本は中国に開港したわけではなくて、むしろ欧米諸国に港を開いたのです。それなのになぜチャイナタウンが横浜にあるのでしょうか。

この浮世絵（下の図）は日本の開港、横浜に黒船が入ってきて当時のイギリス領事館、今の横浜開港資料館のところに船が入ってきたときの様子です。日本が開港して、欧米の人が入ってくる。そのときに欧米の人は日本の方と言葉が通じなかったのです。でも、中国、当時の清は日本よりも早く戦争に負けてしまい、天津、上海、福州、厦門、広州などを欧米に開港してビジネスをしていた。欧米の人たちは一度日本に来たけれども、これは全然通じないということで、香港や広州、上海にいる自分たちとビジネスをしているチャイニーズの人たちを船に乗せて連れてきました。そういうわけ



横浜開港資料館所蔵



横浜開港資料館所蔵

で、ここ（上の図）で見ると清朝の服を着た清の人がいます。彼らは買弁と呼ばれていました。英語では **middleman**。欧米の商館と日本の方の間を通訳したり、両替をしたり、仲介役つまり買弁として来ました。そのころ外国人居留地ができました。今、横浜の元町には西洋料理のお店があって、山手には西洋人の洋館がたくさん残っていますね。その辺りは外国人、欧米人が住んでいて、欧米人の人たちが下りてきてビジネスをする商館の近くにチャイナタウン、今の中国系の人たちが住むところがありました。今の中華街はかつて雑居地でした。

西洋人と日本の方の仲介をしていた買弁は中国系で、彼らも日本語はできなかった。けれども、なぜその役割が演じられたと思いますか。漢字で説明できたのです。「三百両」と言えば「三百」と書いてこれでもいいですか、と。チャイニーズの人は欧米の人とはすでに数年前から英語やドイツ語で話していたのでそれはできた。日本語はできないけれども漢字で通じた、つまり漢字

が非常に重要な役割を果たしていました。チャイニーズ以外にももう1カ国、重要な国の人がいます。インド人です。インドの方もたくさん横浜にやって来ました。インドや香港、広州、上海が船の航路とちょうど重なり、労働力としてインドの方が横浜に入りました。今でも横浜のシルクセンターの裏には横浜インド商工会などがあります。山下公園にもインド政府が横浜に贈呈した水塔があるのですが、あれも関東大震災のときにたくさんのインドの方たちを日本がサポートしたということで感謝の意を込めてそこに建てられています。そういった意味でかつてから移動する人々と横浜は深く関係しています。

横浜開港当時の外国人受け入れ政策

1899年には内地雑居令がありました。かつては欧米の人が暮らす外国人居留地、そして中国系が暮らす雑居地などがあったのですが、それではビジネスができない。例えば今、「留学生はここだけに住んでくださ

い。ここ以外は移動しちゃだめですよ」と言ったらどう思いますか。嫌ですよ。そうではなくて、日本にいったん入ったらどこでも移動できるようにしたのが 1899 年の内地雑居令なのです。

これが外国人登録制度や今の在留カードにもつながる法律です。今は外国人が日本に入ってくるときには、技能、人文知識・国際業務などいろいろな在留資格とビザがあってようやく入れるのですが、当時日本に住んでいた中国人は、三把刀、つまり 3 つのナイフの職業に限られていました。芸人、料理人、床屋、テーラー、この 4 つのうちで三把刀に当てはまらないものが 1 つあります。どれでしょうか。今、日本は芸人が一番売れていますけれども、三把刀、この 3 つの職業の中国系の人しか入れませんと限られたのは、料理人、床屋そしてテーラー、つまり洋服の仕立屋です。これは

どれも西洋人に対するサービスで必要だったものです。当時の日本に住む西洋人は日本料理が口に合わなかったのが中国系の人々が西洋料理を作って給仕していました。そして、床屋さんは、日本の人はちょんまげをしていたので西洋人の髪型に慣れていないので切れない。中国の揚州の方の人が床屋をしていました。テーラーは上海テーラーが有名ですが、今でも中華街の少し端の方に行くと上海テーラーのお店がまだあります。和服を着ていた日本の人はスーツを作れないので、そのスーツの仕立てを上海のテーラーがしていました。

これ（下の図）は 20 世紀当時の中華街、元町側から吉浜橋を渡ってチャイナタウンの南の朱雀門に入るところです。元町からチャイナタウンの南門の方を見えています。チャイナタウンと言っても中華料理屋さんそんなに多くなくて、床屋の看板、トイ



横浜開港資料館所蔵

レットペーパーを売るお店、ピアノメーカー、あとは両替商。チャイナタウンは実は今のような中華料理屋ばかりではなくて、むしろ日本の社会と西洋人をつなぐ重要な役割を果たしていたということが、こういった古い写真や古い文書から見えてきます。

それがなぜ今チャイナタウンは中華料理屋ばかりになってしまったのかというと、皆さん、髪は毎日切らないですね。服は既成のものがあるので、めったにテーラーでお願いしない。でもご飯は1日3食食べますね。そういった自然の需要と供給によってどんどん職を変えていく。チャイニーズのテーラーだった人がレストランを開いたりというふうに、職業がどんどん変わって行って、今のチャイナタウンのようにお料理メインの街になっていったことが推察されます。

人の移動と多様なアイデンティティ

チャイナタウンの移民、中国系の華僑が果たした役割についてまず見てきましたが、私は横浜に生まれ育った生粋の浜っ子なのですが、いつも「あなたは何人ですか」と聞かれると答えるのに困ります。皆さんは私のこと、何人だと思いませんか。私は何人？行く先々でいろいろなことを言われるのですね。日本にいれば「日本の人かな、でもちょっと変わっているな」と思われたり。いろいろな自分がいるはずなのですよね。皆さんも”Where are you from?”と言われたとき、国籍で答える、パスポートで答える、親の国籍で答える、もしくは出身地で答えるといったように「あなたは何人ですか」と聞かれているときに実はいろいろな要素があるはずですよ。

今、そのように多文化、多重なアイデンティティを持っている人はたくさんいます。世界人口は76億人ですが、1年以上自分の生まれたところ以外に暮らしている人、つまり移動している、移民の人は2億人いるといわれています。そして、そういった親のもとにいる子どもたちも考えると、移民、もしくは移動と関連している人、もしくは2つ以上の文化を持っている人は2億人以上いると思います。そうすると、少なく見積もっても世界の人口の3%以上、学校のクラスの30人に1人は移民とか多文化を持っている人である可能性があります。自分の中にいろいろな文化の要素がある、アイデンティティがある人がカメレオンのように色を変えていく。レインボーメタファー、虹のメタファーというものを後ほど皆さんに紹介していきたいと思います。これは私が博士論文で世界の華僑、華人のビジネスマンをリサーチして見つけた、1つの彼らの在り方です。

家族の歴史と世界の歴史

これ（下の写真）は私の3歳ぐらいのころの写真です。誰の真似をしているかわかり



ますか。ジャッキー・チェンじゃないんですよね。もうちょっと古いんですよ。ブルース・リーが私のアイドルだったのです。ブルース・リーの真似をしています。

これ（下の写真）は私の父です。今年で97歳になります。いろいろな戦争を経験してきました。中国東部のハルビンからも



う少し奥まったところに牡丹江というところがあるのですが、そこに生まれ育ちました。1921年に生まれたのでいろいろな戦争を経験しましたし、満州の時代も経験しているのですね。日本が中国に植民地である満州国を作ったころ、彼は自分の故郷にしながら、日本の統治下にあったので日本語で学んだ時期もあります。日中戦争を終えて日本が敗戦国となって退き、中国は勝ったのですが、今度は中国の中で国民党と共産党の間で国共内乱という戦争が起きました。私の父の家は地主でした。土地はたくさん持っていましたが、中国の中で共産党が勢力を増す中、一番につるし上げられて、悪いやつだと言われる地主の家の出身でした。

中国で内戦が始まり逃げなければいけない。おじいちゃんと私の叔父にあたる弟と父は、帯に少しの金や銀、つまり、どこに行っても何かに換えられるものを隠して中国のロシアに近いところからずっと南下して台湾に渡りました。

そして台湾に渡った後、私の母に出会って台湾で2人は結婚します。私の母は国民党の将軍の娘でした。やはり国共内乱で国民党の勢力がどんどん弱まっていくときに、母方の祖父母はいち早く台湾に渡っていつかまた攻め返すという思いでいたのですが、それは実現しなかった。中国と台湾は同じ中国人と言うけれども、でも事実上2つの政権があって、今では台湾は台湾人アイデンティティがどんどん強まっています。私の両親は、いわゆる台湾に渡った外省人です。台湾省以外の省から来た人で当時は避難民ですね。当時、外省人の避難民たちは北投というところに暮らしていました。

父は台湾に渡った後、台湾を自分の居場所だと思えなかった。マイナス20℃、30℃が当たり前な暮らしをしていた人がトロピカルな台湾に渡って、気候からして体に合わなかったのでしょうか。数年後、彼は留学する決断をして日本に来ました。1953年、54年ごろに船で日本にやって来ました。日本を選んだ理由はいろいろあったのだと思いますが、その1つには、やはり満州国を経験して日本語をもう既に学んでいたということがあったのではないかと思います。

祖母や父の妹は中国に残ったまま、祖父は中国を離れて祖母には二度と会えないまま他界しました。

私の母は、台湾でキャリアウーマンをしていたので、父は当初1人で日本に来まし

た。母は今の日本でいえば日銀のようなところで人事を担当していて、自分専用の大きなオフィスがあって父の3倍の給料をもらっていました。子どもを5人育てて、日本にいる父はたまに帰ってくるという生活をしていました。

1961年に父が横浜の中華会館というところで職を得ました。中華会館は今年で150周年を迎えますが、そこで職を得たので、母も日本に移住しないかということで、1961年に母が子どもたちを連れて日本にやって来ました。山下公園からすぐ近くの、今、KAAT（神奈川芸術劇場）という劇場があるところに昔アパートがあって、父が「これから暮らすところはここだよ」と言っていてドアを開けたときに、母は「え？これってキッチン？それとも何？」とびっくりしたそうです。家族7人で7畳半の部屋でこれから暮らすと知ったときに、自分のオフィスはこの3倍も4倍もあるのにと相当ショックだったそうです。そのとき、日本に来たことをすごく後悔したと母は言っていました。

そして「無国籍」に

私は1971年に生まれたのですが、これ（右の写真）は1972年の家族写真です。私の『無国籍』という本の表紙にも使われているのですが、私にとっては少し重要な年です。何かというと、日本が中華民国、つまり台湾と国交を断絶し、中華人民共和国と国交を結ぶことに決めた年です。そのころ横浜をはじめ日本に住んでいた5万人くらいの華僑の人たちの多くは、それまで日本が認めていた中華民国の国籍を持って暮らしていたのですが、日本が中華民国を認

めなくなるということで国籍をどうしようかと慌てました。自分が持っているこのパスポートがもう日本では認められなくなる、そしたら自分の財産はどうなるのだろう、どういうふうに移動することになるのだろうと、みんな、非常に動揺しました。

そのときに日本が認める中華人民共和国の国籍に変えた人もいました。あとは、日本が簡単に帰化できるようにしてあげる、日本に帰化しなさいということで、日本国籍に変えた人もいました。日本国籍に変えたときに多くの方が日本っぽい名前に変えているのです。山田さんとか、もしくは陳さんだったら江川さんとか、決まった名前、日本っぽい名前に変える人もいました。あとは、もう日本はやめてアメリカに移住しようとか他の国に行った人たちもいたのです。

そして1972年、このときにうちの家族は何国籍となったと思いますか。無国籍（ステイトレス）になったのです。運転免許証



の本籍のところには無国籍とはっきり書いてありました。留学生とか日本の国籍でない方は在留カードを持っていると思いますが、私は在留カードの制度が始まる前の外国人登録証明書を持っていました。その国籍欄にも無国籍と書いてありました。

私は意味がわからなかったのです。無国籍？なんで？だって中国人でしょう？親には中国人だって教育されているのに、なんで私の国籍のところは無国籍なのと、不思議に思いました。父にも説明を受けたのですがよく理解できませんでした。そのまま中学、高校を過ごしました。当時、私はいろいろなパスポートを持っていました。中華民国・台湾のパスポート、中華人民共和国のパスポート、香港に入るためのパスポート、あとは再入国許可書、これは日本に入るためのパスポート。無国籍とか難民の人で自分の国のパスポートがもらえない人が持つ渡航書です。私のはこの中にも無国籍と書いてありました。

台湾にも日本にも「入れない」

皆さん、無国籍のイメージはどうですか。どんな人？無国籍と言ったとき、どのように思いますか。だいたいマイナスのイメージなんですよ。私は生まれて1年もたたないうちに無国籍になって、ずっと無国籍のまま就職もしました。それまでいろいろなことがありました。

まず紹介したいのは、皆さんぐらいのときのことです。ちょうど大学2年生とか3年生ぐらいのときに、両親と一緒に韓国であった会議に行って日本に帰ってくると、ファックスが届いて「陳さん大集合の会」のような世界中の陳さんが集まる会が

あると。そういう会がチャイニーズの間にあるのです。例えば、ブラジル、ペルー、いろいろなところに行った山田さんが、今年はサンパウロで集まりますよ、という山田さんの会のようなものがあるのです。私は陳という名字なので、世界中の陳さんが集まる会に参加できます。そしてみんな同じ祖先の末裔だということで先祖崇拜といった儀式をして、あとはビジネスや各国の政策の話をしたり情報交換をするのですが、そういった会がフィリピンで開かれるという案内でした。それを見て「うわー、フィリピンでそんな会があるの？パパ、行こうよ」と言ったら、父が「いやあ、フィリピンに行くのはビザが大変だから」と。無国籍だとどこに行くにもビザが必要です。そうすると事前の準備がすごく大変なのです。それを父は嫌がったのですが、それは全部私がやるから任せてと言って、頑張って数週間もかけてようやくフィリピンに行くためのビザを手に入れて、そして父と母と一緒にフィリピンのマニラでの3日間くらいの「陳さん大集合の会」に行ったのです。

当時、国際線は成田空港でしたが、日本が断交した台湾の中華航空だけは成田に行けなくて、羽田空港に残りました。横浜からだとならば羽田は近いのでそれを使ったのです。ちょうどゴールデンウィーク明けでした。出かけるときにパスポートにスタンプを押す人が「いいですね、この時期に家族旅行ですか。昨日まではすごい人でごった返していたんですよ。今日は空いていいですね」と言って、父が「オッホッホッホ、はいはいはい」と言って出かけたのです。父は身長が187センチぐらいある非常に目

立つ人なので、その人も覚えたのだと思います。

マニラの会合が2、3日あって、帰る前の日に母が「ちょっと遊び足りないね」と。フライトが中華航空で台湾経由なので「台湾に寄って帰らない？」と提案したのです。私は学校をサボって行ったので、「それはだめだよ。大学サボっているからすぐ帰らなきゃ」と言ったら、母が「いいじゃない、1日ぐらい」と言って、結局は台湾に寄って兄に会って日本に帰ってくることになったのです。

マニラから台湾に到着し、台湾に入るときに私たちは台湾のパスポートを出します。そのころ、私たちからすると台湾が祖国のような感じだったので「台湾に帰る」という表現をしていました。まず父、そして母が入って、私の番になったときに私がパスポートを見せたら「だめ、あなたは入れません」と言われたのです。私が「どうして？」と言ったら「あなたはビザが必要だ」と。「台湾のパスポートを持っているのに何でビザが必要なの？」と訊ねると「あなたは海外の人だから」と言って、自分の国だと思っていたところにビザがないと入れなかったのです。父と母が待っていて「どうしたの？」と。私は「入れない」と言ったのです。そうしたら母が「あら、そう？じゃあ、日本にいる家族に電話しておくね」と言って、両親は台湾に入り、私はターミナルに戻りました。本当に「ああ、国境線ってここにあるんだな」と。それまで国境線、ボーダーなんて考えたこともなかったのですが、そのときに「あー」と。

両親は入って行って、私はターミナルに戻って、すぐにブースに行って羽田に帰る

フライトに変えてもらいました。

数時間も待って、待ちくたびれて、今度はようやく羽田に着きました。日本に、羽田に着いたときには「もう早く家に帰ってお風呂に入って寝たい」と思いました。

日本に入るときに再入国許可書と当時の外国人登録証明書を見せました。そうしたら、そのブースの人が私の書類を手にとって「あなたは後ろで待っていてください」と後ろのほうのベンチに座らせて。私がしばらく座っていると、横に並んでくる人が、ちょっと怪しい感じの人がお互いに「あなた、何かいけないものを持ってきたの？」などと目で語っているんですよ。私は何がいけなかったんだろうと思って、私のバッグの中に何か入れられたのかなとか、いろいろ考えました。

そしたら「最初の方」と呼ばれて別室に連れて行かれたのです。それで初めて知ったのですが、パスポートを見せて立って審査するのが第一審査と言うのです。事務所に入れられて座って審査されるのは第二審査で、その第二審査を受けたのです。それで「はい、お座りください」。何が問題だったんだろうと思っていたら「あなた、今から台湾に帰ってください」と。私、「はあ？」とびっくりしました。「あなたはもう日本に入れませんので、台湾に帰ってください」と強く言われたのです。

沈黙が続きました。意味がわからない。「私は家が横浜にあって日本の永住者なのです、書いてあるでしょう。ここに永住者と書いてあるでしょう。どうしてですか。」「いや、あなたはもう入れません。あなたが出るときに再入国のビザを取らなかったのもう入れませんから」。アニメとかで見

る「ガビーン」って顔、まさに私はああい
う顔だったと思います。

どうしたらいいのかわからない。どうし
よう、何をしたらいいのかわからないとい
うときに、1人のおじさんが入ってきて「あ
ら、お父さんとお母さんは？」と私に言う
んですよ。審査の人がそのおじさんに「お
知り合い？」と。「いやいや、知り合いじゃ
ないけど、この子、2、3日前に出かけた子
だよ、ねえ」と。「え？2、3日前？本当？」
と言って2人はまた違う部屋に行って、そ
して「ああ、良かった、良かった」と言っ
ているんですよ。私の目の前に来て大きな
台帳にポンポンポンと判を押し、そして
「3,000円」と言われたのです。「は？3,000
円？」何かというと、その場で私の再入国
許可のビザを発行してくれたのです。しか
もスタンプ、日付を変えて。私が出国した
日以降、羽田で再入国ビザの申請をした人
がいなかったのができたのです。今
のように全て電子化、データ化されていた
ら、それはできなかったかもしれません。
でも、そのときはまだ台帳で管理してい
たのでそれができて、私はようやく日本に
入ることができて、大丈夫だった。

そのときに初めて「ああ、無国籍ってこ
ういうこと」と。国家とか、私と日本の関
係、そして私と台湾の関係って、こんな紙
切れ1枚でバサッバサッ切られてしま
うんだと。そして、私はほこりのようにど
こにも必要とされていない存在なんだとい
うことを初めて体で感じたのですね。

そういう経験があった後、誰にも自分が
無国籍であるということは言えませんでした。
大学に戻ってもその事件のことは誰にも
話さなかったし、ボーイフレンドにも話

さなかった。3年、4年になると、みんな就
職活動をしたりするのですが、そのときも
私は就職活動は怖くてできなかった。なぜ
なら、履歴書に国籍欄もしくは本籍欄があ
って、そこに「無国籍」と書くと絶対切ら
れるだろうなと思ったからです。そういう
社会だった。

大学3年ぐらいのとき、アパートを探さ
なくてはならなかったのですが、アパート
を借りるときも、身分証明書が必要なとき
に外国人登録証明書は嫌だったので、身分
証明書に運転免許証とかを出していたんで
す。運転免許証を出すと私の本籍のところ
は無国籍なので、「あれ？無国籍ってどうい
うこと？」とだいたい聞かれるのです。通
常、みんなネガティブなイメージです。そ
うすると、大家さんが、この人に貸して毎
月ちゃんと家賃を払ってくれるんだろうか
とか、いろいろな思いがあって、直接は言
わないけれども、そういった差別というか、
偏見みたいなものがありました。でも、実
際、無国籍でも、私は永住者であって、そ
して普通に暮らしているんですよというの
をどうにか説明をしなきゃいけない。その
ときに、親の銀行残高証明書や在職証明書
などを見せて、ようやく貸してもらえると
いう状況でした。

多様な「無国籍」の人と出会って

無国籍というとはしばしばネガティブなイ
メージを持ちますが、実際はそうとは限り
ません。いろいろな人がます。国家に翻弄
されて無国籍になっている人もいますし、
無国籍の人の中には制度上、仕方なく無国
籍になっているケースもあります。難民で
あったり、難民2世であったり、いろいろ

なケースがあります。

皆さんがご存知のアインシュタイン、彼もかつて無国籍でした。彼が無国籍だった理由はいろいろあると言われていますが、その1つには兵役が嫌で研究に没頭したくて国籍を離脱したと言われていました。

アンちゃんという女の子がいます。彼女はお父さんが日本国籍、お母さんがフィリピン国籍で、彼女は日本で生まれました。両親が正式に結婚していれば、彼女はお父さんの国籍を取得できたのですが、お父さんとお母さんは正式な結婚をしていませんでした。しかもお父さんはお母さんに「正式に籍を入れたよ」と言いながら入れていなかったのです。お母さんは日本語がそんなに達者ではなかったですし、いろいろな書類を行政に出すのも全部お父さんに任せていたので、正式に結婚していないのを知らずにいました。そして、自分はオーバーステイになってしまい、彼女が生まれたときも出生届を出したら自分が捕まってしまうということを恐れて、届けも出さず8歳ぐらいまで育てました。最終的にはお母さんが捕まって強制送還される際にフィリピンに戻ったのです。私は彼女に会いにフィリピンに行きました。彼女のアイデンティティは、自分は日本人だと思っていたようです。

アクショーフさんという白系ロシア人の方がいます。ロシア革命とロシア内線を逃れハルビンに移住し、その後、満州時代に日本に留学した方です。皆さん、モロゾフのお菓子は知っていますか。モロゾフは日本に来た白系ロシア人が創設したお菓子屋さんです。

アクショーフさんはドクターをしてい

て、六本木にたくさんビルを持っています。マイケル・ジャクソンやフランスのシラク元大統領など海外のVIPが日本に来たときに健康チェックをする際はいつもアクショーフさんが担当医をしていました。彼もずっと無国籍のまま日本で暮らしていました。天皇からは勲章もいただいている方です。プーチン大統領に「ずっと無国籍だと大変だろうから、ロシア国籍をすぐあげるのでいったん帰っておいでよ」と言われたそうですが、アクショーフさんは、「ハッハッハッ」と笑って「いや、僕はステイトレスでいいんだ。僕のステイトレスはグローバルシチズンだ」と。自分はグローバルでどこか1つの国だけに閉じ込められるのは性に合わないと、死ぬまで無国籍を通した方です。

このように、実は無国籍者というのはいろいろな人がいることを知ってほしいです。私が悩みを抱えていたころは、無国籍者といっても、たたくドアがなかった。無国籍について相談できる窓口がなかったので、仲間たちと「無国籍ネットワーク」という組織を発足させました。今では無国籍に関するシンポジウムや無国籍についてわかりやすく伝えるセミナーなどを開催しています。

無国籍者をめぐる世界の動き

私は、かつてアメリカに3年間住んでいて、アメリカにいたころ国連で就職しようと思ったのですが、無国籍がゆえに国連での就職は叶いませんでした。国連の加盟国の国籍を持っていないので、就職できなかったのです。国連は2014年から無国籍についていろいろな取り組みを始めています。

日本にも無国籍の人がいること、日本は無国籍条約を批准していないことを知ってもらおうと、国連に呼ばれてトークもしました。今、世界で 1,000 万人ぐらい無国籍の人がいるのですが、国連が無国籍の問題を解決していこうという取り組みを始めて”I Belong”というキャンペーンを始めました。一緒にトークした人は、ドミニカ、タイそしてパキスタン出身で、無国籍を経験した人たちでした。最近ニュースでもロヒンギャの問題がしばしば報道されています。世界中の無国籍者の写真を撮っているグレッグ・コンスタンティンさんは映像を通して無国籍の実体を知ってもらおうと写真展を開いています。

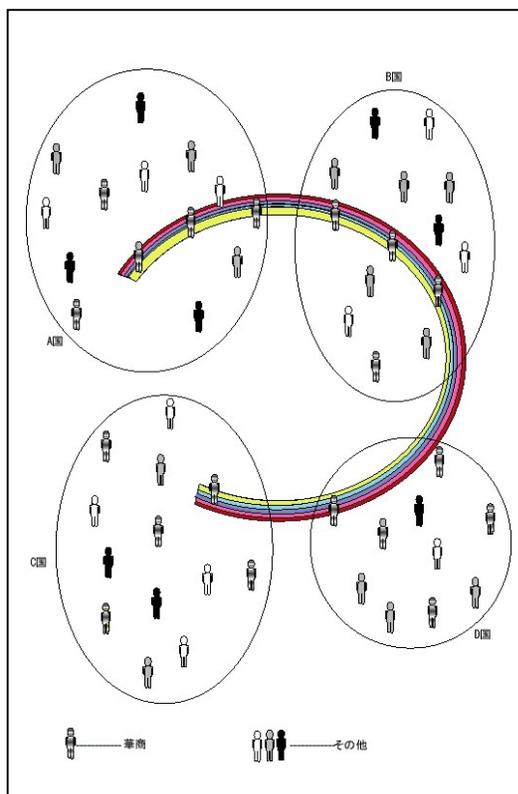
無国籍の人が、”Where are you from?”、「どこの人？何人ですか？」と言われたときに、どう答えるのでしょうか。一方、重国籍の人、例えば蓮舫氏はどう答えるのでしょうか。彼女は自分は日本人だと言っていますが、でも、人によってはそうは見ないでしょう。そこに国籍やアイデンティティの難しさがあります。

虹のメタファー

これ（右の図）は最初のほうでも少しふれましたが、私がいろいろ考えて図式化したものです。大きな円は国と見てください。これはA国、B国、C国、その中にいろいろなエスニシティを持った人たちがいます。例えばマレーシアでいえば、マレー系、インド系、そして中国系というふうにいるいろいろな民族がいます。これが日本だったら、アイヌの人もいれば、沖縄やコリアンの人もいますね。

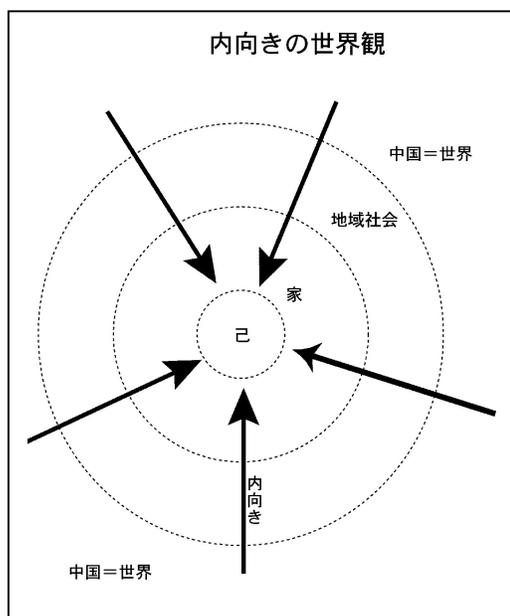
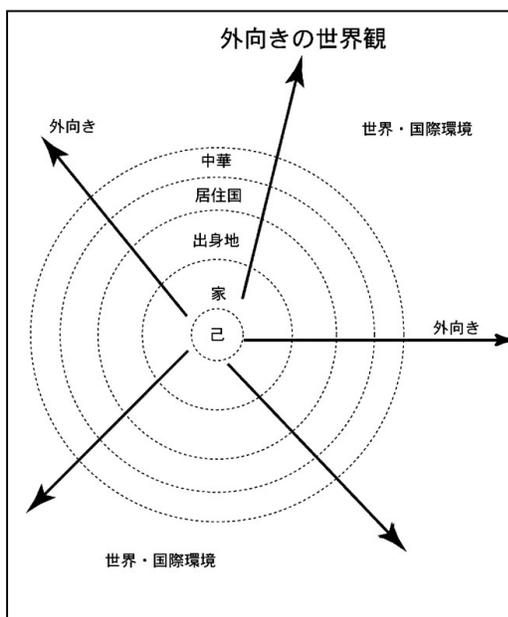
虹のメタファーはどういうものかという

と、例えば華僑といったとき、華僑で独自のネットワークを持っているというイメージがありませんか。華僑なら華僑独自のつながり。陳さん大集合の会で世界中の陳さんが集まる、そういったつながりが一例です。でも、虹のメタファーはどういうものかということ、例えば虹色になっている人たちをチャイニーズとすると、マレーシアにいるチャイニーズ、そしてシンガポールにいるチャイニーズ、日本にいるチャイニーズ、韓国にいるチャイニーズがつながったときに虹に見えて、その人たちはネットワークを持っているように見えます。それをチャイニーズのネットワークがあると見る。実際に存在するかどうかというよりも、どう見るかによると思うのです。これをユダヤ系に当てはめてもいいかもしれません。ユダヤ人ならばトランスナショナルなネッ



トワークがあるのではないかというイメージがあります。でも、本当にそうなのか。それは見方によるのではないか。

次に、あなた自身を例に考えてみてください。自分自身の生活ではどのようなつながりを有していますか。自分の周りに家族がいて、社会があって、例えば学生であれば大学との関わりがあって、サークルでの友人とのつながりや趣味、さらには国家と自分のつながり、そして世界などと重層的なつながりがあると思うのです。これをどのように見るか。外から内側に見るときにはこのように（下の図）見えてくると思うのです。

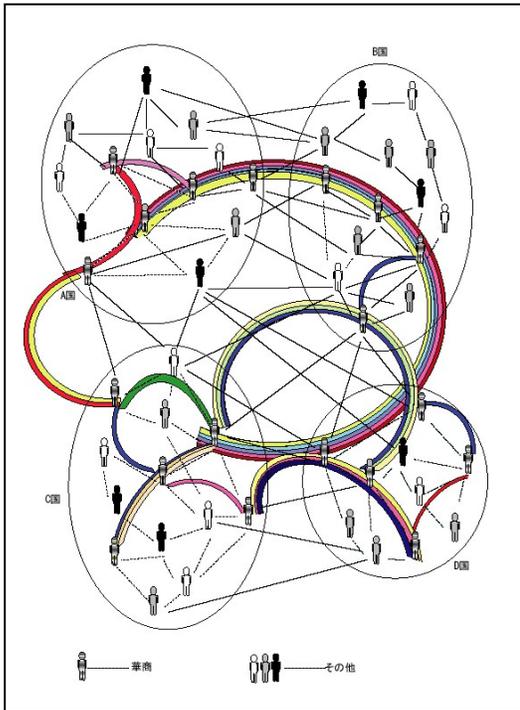


でも、逆から、つまりグローバル社会という視点で、自分から外を見ていくといういろいろな広がりがあると思うのです。それが本当は右上の図のような日常なんじゃないかと思うのです。だけれども、そこに一定の角度から一定の要素があって見ると、虹に見えます。なぜ虹かというと、水つまり水滴の要素と光の要素があると考えていま

す。これは今のアジアでも言えることです。アジアの中で移動した人は新しい国に行ったときに「よそ者」に見られます。マレーシアでもインドネシアでもタイでも、あの人は外から来てちょっと違うといった扱いを受けます。そういった移民の人たちは海を越えてやって来ます。日系人もそうですが、海を越えて渡ってきた海の要素。そして、新しい土地に行って差別を受けたりよそ者にされたり、もしくは自分の故郷と遠く離れて寂しい思いをして流す涙の要素。3つ目には、新天地では頑張っても一生懸命働かないといけな。マイノリティは移住先でマジョリティよりもっと働かなきゃ認めてもらえません。そういった努力から流れる汗の要素。

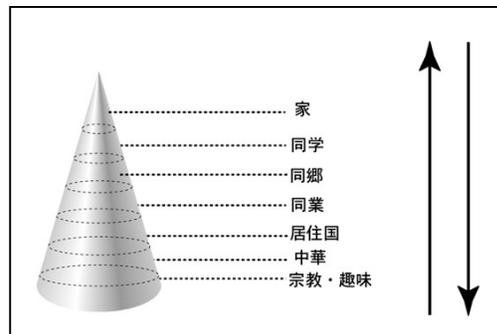
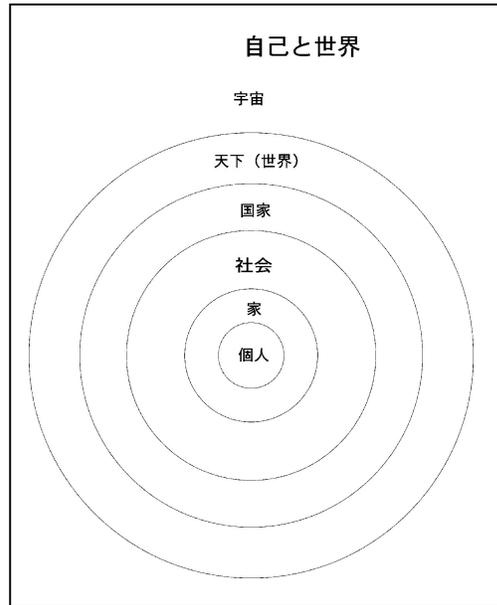
この3つの水滴がある角度の光で外部から照らされたときに「ああ、あの人たち、ネットワークがあるね」と認識されるのがこれ（次頁の図）なんじゃないかと思うのです。

でも、実際はその人たちの中にもいろいろ



ろなつながりがある。チャイニーズかもしれない。しかし、タイに何十年も住んでいてタイ人としての文化やタイを愛する要素もある。2世、3世になったら中国語よりもタイ語しか話せないというような人もいると思うのです。最近では宗教的な要素も大きいかもしれない。そんないろいろなつながりやレイヤーがあるのが人間の本当の姿なのではないかなと思うのです。

人は、実際はいろいろな形でつながっている。1人の人を色で見れば、私たちがどう見るのかによって見え方が違ってくる。また、その人をどう見るかによって見えてくるものも変わってくるのではないかなと思うのです。なので、世界との関係も、右上の図のように上から見るのか、横から見るのか、その人をどういうふうに見るのかによって、その人のネットワークも変わってくるのではないかなと思うのです。



「人」をどう見るか

国家も往々にしてその人をパスポートで見たり国籍で見たりするという、一定の視点があります。だけれども、その人を、その人がずっと生きてきたライフストーリーで見ていくとまた違った見方ができるのではないかなと思います。例えば、最初に言ったイングリさんをイギリス人として見るのか、もしくは長崎の人として見るのか、日系人として見るのか。いろいろな見方ができると思います。そして、彼の作品にもいろいろな要素が現わされているのではないかなと思います。それをただ、ぱっと切ってイギリス人だと見たり、ぱっと切って日系

人だと思ったり、1つの要素だけで語るの
は短絡的ではないかと思ひます。

私は一昨日、ロヒンギヤの人をゼミに呼
んでお話ししてもらったのですが、彼女は
日本国籍を有するロヒンギヤです。とても
きれいな方で、電車に乗っているときに「ね
え、あの人、顔、超濃くない？」と自分に
ついて噂されているのを耳にして、笑いを
我慢することがあると言っていました。ヒ
ジャブをかぶっているので日本語ができ
ないと思われ、目の前で堂々と噂される。で
も、自分は日本名も日本国籍も持っていて、
日本人としての誇りもある。でも見た目
でよそ者と判断される。これはほんの一
例ですが、私たちの身近で起こっている
ことです。

例えば、ハワイにいるチャイニーズや日
系人を、皆さんはどう見ますか。また、オ
ランダに移住した中国系の4世代一家。イ
ンドネシアにいた祖父母がオランダに渡
って、2世、3世の代になり、3世はオラ
ンダ人と結婚して4世の子どもたちが
生まれます。こういった家族の在り方をど
のように見ますか。このような移民が増
えている、今では世界の人口の3%、4%
になっています。

皆さんに冒頭で言ったように、自分
には関係ない、他人事だと思っ
てほしくないです。場合によっては、留
学生と出会って恋に落ちるかも
しれない。そして自分が国際結
婚をするかもしれない。自分の
子どもがin betweenな人間になる
かもしれない。そういった時代
に私たちはいるのではないかと
思ひます。アウトサイダーだ
った自分を、インサイダーに
する。そのときに自分がどう
考え、どうふるまうのかが重
要になって

くるのではないかなと思ひます。

居場所を作り、架け橋になる

これ(下の写真)は中華街にある実家
のお店で、こんなふうに円卓を囲んで、
家族でよくご飯を食べるのですが、私
にとって家とか自分の居場所とい
うのは日本でもない、中国でも
ない。国とかそういうもの
ではなくて、ここが居場所だと
感じます。このときに家に
いると感じる。ここに
いると自分らしく
いられると思ひ
ます。



皆さんの中には留学をする方も
いるかもしれません。留学し、そ
こで得た文化というのが自分
の一部になっていきます。それ
を自分の国に帰ったときにど
のように橋渡ししていくかとい
うのが非常に大切になって
くるのではないかなと思ひ
ます。

グローバルに育つこと、そして、
脱国家的なアクターの可能性
について考えたとき、近年、
非常に自国第一主義が強ま
っている中、私たちはまさに
試練、つまり岐路に立たされ
ていると思ひます。これから
先も国籍というものが当たり
前で、私たちはその制度の中
でずっと安住していくのか。
もしくは、そうではない、新
しい何かを見つけていくのか。
それによって今後の社会の
在り方、世界が違ってくる
のではないかなと思ひます。
グローバルなメンバーシップ、

もしくはローカルなメンバーシップ、それがシチズンシップというのか何というのかわかりません、まだ私もそこまでたどり着いていない。しかし、1 つわかったことがあります。

『パスポート学』という本を書く中で、いろいろなパスポートを比較し、いろいろな政策を比較していく中、実は制度や法律には穴があることがわかりました。そして、法律というものでいろいろな人を分けているし、国家という制度でいろいろな人のメンバーシップを決めているのですが、実は日本でミャンマー国籍、ベトナム国籍と身分証明書を渡されている人が、ミャンマーに国籍がない、ベトナムに国籍がない、つまり事実上の無国籍者で、私が持っていたような再入国許可書で移動している人がいっぱいいることがわかりました。法制度が人の移動に追いついていないのです。

中国が一带一路という政策を始め、どんどんグローバルに進出しようとしています。そこで華僑がどんなふうに使われているのかというのを見ると、今言ったことがわかってくるかなと思います。中国の一带一路政策がマレーシアに入っていく、そのときに華僑、華人のネットワークをうまく駆使している。しかも、一带一路というコンセプトが上がってくるのもトップダウンだとは限らない。華僑たちのアイデアがあって、そういった一带一路の政策が出てきた。例えば、日本と中国の関係を見てもそうですが、孫文が革命活動をしているときに横浜は非常に重要な拠点だったのです。孫文が横浜中華街で華僑が提供した資金を使って新聞を作ったり、当時の中華民国の国旗をデザインしたと言われていました。そのよ

うにグラスルーツのいろいろなアイデアが国家形成にも影響しているし、それが大きな推進力、プッシュ要因になっている。そうしたことが、今、まさに一带一路でも見られることだと思うのです。それをどのように使うか。国家ありきで見ていくのか、もしくは国家を変えていく存在として自分はあるべきなのか。与えられたもので安住していい時代に皆さんは生きていないと思います。情報はもちろん、いろんなものが目まぐるしくどんどん変わる時代、自分の在り方をフレキシブルにしておかないと、どんどん淘汰されていく時代に私たちは生きていくのではないかと思うのです。

皆さんがこれから3日間学んでいく「アジアの中の日本」、グローバルな視点で見ていると日本はちょっと乗り遅れちゃっているところがあるなあと感じなくもないのですが、これを変えていくのは皆さんなのではないかと思うのです。ここで築いたネットワークがいろいろな国際関係を変えていくかもしれない。そんなときに、自分はフレキシブルでいなければいけない。けれども、しっかり芯を持っていなければいけない。自分の芯をちゃんと持ちつつも、非常にフレキシブルで、いろいろなところを自分の居場所にする。そして、自分がただそこにいるだけでなく、自分がブリッジになっていく。虹のメタファーもそうですが、自分のいろいろな柔軟性を使って、自分と、もう1つの大切なところ、もしくは違うところとのブリッジになっていく。自分が社会の架け橋、すなわち虹になっていくことを、皆さんにこれから考え、行動し、そして実現していただきたいと思います。

長くなりましたが、これで終わりにしたい
と思います。ご清聴ありがとうございました。